
僕の愛しい吸血姫

セブン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の愛しい吸血鬼

【Nコード】

N3916BA

【作者名】

セブン

【あらすじ】

満月の夜、僕は吸血鬼に血を吸われる

吸血鬼、アリーシア・クロウリーに血を吸われた僕、伊浪恭平は、人としての生を失い、彼女とともに生きる使徒になる。

使徒になってしまったことを深く考えていなかった僕だけど、家を出ていた双子の妹、響子が家に戻ってきたり、アリーシアのような人間とは違う異端の存在を狩る少女、天川李桜に襲われたり。

そして、アリーシアの弱さと涙を知った僕は、ひとつの決断をする。

プロローグ・愛する君へ・

夜風に揺れる木々のざわめきが大きく音を立て、彼が花草を踏みしめる音を掻き消す。

金色の長髪を揺らしながら、一步、一步、ゆっくり、しかし、確かに歩を進める。

瞳に灯った紅は、ルビーのような輝きを放ちながら、しっかりと前を捉え、目的地を見定めている。

はあ、はあ、と荒々しい息を漏らし、全身を襲う気だるさ、額から伝う汗。

それらすべてを無視して、彼は歩き続けた。

決して止まることなく。

木々をかき分けながら進んだ獣道の果てに、彼は目的の場所にたどりついた。

「ふっ……」

なんとかたどりつくことが出来たということに安堵すると、思わず笑みが零れてしまう。たとえば、これから自分がどのような道をたどる運命にあるか知っていたとしても。

木々に囲まれ、ぽつんと意図的に開かれているように思える草原の上、彼は仰向けに倒れた。

すでに肉体の疲労は限界に達しており、これ以上の移動は無理に等しかった。

だが、それでも良かった。

彼の目的は、この場所にたどりつくことさえ出来れば、果たすことが可能なのだから。

錆ついた機械のように、歪な動きで腕を空に伸ばす。

指の先からは、砂粒のような、金色の粒子が出ている。

いや、違う。

それは彼自身だった。

彼の指が、金色の粒子となって、風にさらわれ、流れていく。

(覚悟はしていた……わかってもらって……故に、後悔などありはしない)

ほんの少しの疲労も防ぐために、声には出さず、心の中で自分に言い聞かせるように呟いた。

彼は知っていた。

(すでに私の体は限界だった……ここまで持ってくれたことは奇跡に等しく、だからこそ、私はこの終わりを受け入れよう)

自分がもう、長くはないと言つことを。

死が、目の前に迫っているということ。

満月の色に似た金色の粒子を放ちながら、彼の体は消え、手はもうなく、今も手首から徐々にその姿を変質させている。

もって一分、と言つたところだろうか、と推測しつつ、彼は静かにまぶたを閉じた。

神経を研ぎ澄まし、夜風が揺らめかせる木々のざわめきを、ノイズを除去するようにして排除し、それ以外の音に耳を傾ける。

……がさ、がさ。

静かだが、確かに彼の耳には届く。

何者かが、草を、花を、木を、土を踏みしめる音が。

（私の魔力を感じて追ってきた、か。燃えかす同然の私の魔力を感じ取れるとは、彼らも相当に鋭敏なものだ）

自分を追ってきただろう人物たちに思いを馳せながら、まぶたを開いた。

すでに身動きが取れない彼は、首だけを左右に動かして、自分の現在を確認する。腕は、肘小僧までまだ

残っている。脚は、もう太もも辺りまでしかない。

痛みはなかった。それだけが救いかもしれないな、と再び満月を見

上げる。

(あの子にも、見せてあげたかった)

脳裏に浮かぶ、愛しい娘の笑顔。

(しかし、それも叶わない)

それはきつとだれのせいでもない。だれも悪くない。

(私と『彼女』が選んだ道は、決して間違ったものではなかった。今、ここにたどりついた私だからこそ、そう言える)

かつてここを『彼女』と訪れたとき、彼は後悔した。

自分は間違いを起こしたのではないのかと。後悔して、でもそれを断ち切ってくれたのは『彼女』だった。

だからこそ彼は、そんな『彼女』と交わした約束を果たすために、愛娘を置いて、己の命を燃やしながら、ここまでやってきた。

たとえ『彼女』がもうこの世に存在していなくとも。

自分がこれから、この世から消え失せてしまおうとしても。

ただひとつ、『彼女』と交わした約束を果たすことが出来れば、そこに悔いはない。

(さて……そろそろ、か)

腕が消え、脚が消え、もう残りは少ない。

彼の言葉を掻き消すように、一際大きな風が吹く。

彼を中心として、草原を覆うように金色の輝きが灯る。

彼の、命を賭した魔術が草原に響き渡り、風を起こしている。

その瞬間、彼を追っていた足音が早くなる。

しかしそんなこと、すでに彼には関係なかった。

（わた 目的 果たされた アリサ ）

巻き起こる風が、金色の粒子をさらう。彼の肉体の消失が早くなって、今にも消えそうになる。

おぼろげになる意識の中で、『彼女』と、愛する娘との記憶が走馬灯のように流れる。

いろいろなことがあった。

だが、その中でも彼の中に鮮明に残る、愛しい記憶が、蘇る。

娘を中心に、左右に彼と『彼女』が立って、手を繋ぐ。そうして三人で歩いた、彼の地。

(アリーシア)

蘇った娘の笑顔に、微笑み返すようにして、彼は

()

最期を迎えた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1】

世にも綺麗な少女が倒れていた。

満月の月灯りに照らされて、その存在を主張するように燦然と輝く金色の長髪を乱れさせて、アスファルトに横たわる少女。

その日の僕は、いつも通りに学校に行つて、授業を受けて、家から徒歩五分のコンビニでのアルバイトを終えて、家に帰宅する途中だった。

その道中に倒れていた少女を、僕はすぐさま駆け寄り、抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

返事はない。

整った顔には少しの汚れと汗が見られる。僕はポケットからハンカチを取り出してそれを拭う。

規則的に繰り返される呼吸は荒く、少女の様態が悪いことを示している。

すぐさま最寄りの病院を思い浮かべてみるが、一番近い病院でも二十分はかかってしまう。携帯で救急車を呼ぶという手もあるけど、残念ながら、バッテリーが切れてしまっているので無理だ。

「……………血……………」

少女の小さな唇から、吐息のように小さな声が漏れた。

『ち』という音。

それを聞いた僕は、少女がどこか怪我をしているのじゃないかと思いい、少女の四肢を見渡す。

少女はいわゆるゴスロリ服と呼ばれる服装に身を包んでいて、変に露出している箇所が多いので、これはなかなか嬉しい……………いや、目のやり場に困るのだが、見た限りでは出血している箇所は見受けられない。

もしかして、僕は少女の『ち』という音を間違っただけで解釈したのかもしれない。それが、『ち』という音以外にもなにかを言っていたのか。

「ねえ、だいじょ
」

訊ねようと、少女の顔を見ようとして、僕は固まった。

あまりにも近過ぎる。それこそ、ほんの数センチどちらかが身動きを取れば、唇と唇が重なってしまいそうな距離に、少女の顔があった。

蒸気して赤くなった頬。ふっくらと盛り上がった桃色の唇。美しく長いまつ毛。少女が僕に身体を寄せたことにより、密着した腕に伝わる胸の感触。

どれもが僕の心臓の鼓動を高まらせ、思わず唾をごくりと飲んでしまっ

下手に動かすと、僕がわいせつ罪に取られてしまうような危険性もあるため、しばしの膠着状態のまましていると、不意に少女が力を失くしたようになだれ込んできた。

それを受け止めると、僕と少女は地べたで抱き合っような形になってしまった。こんな綺麗な娘を抱きしめられるなんて、とんだ役得だよなあ……とか思っている場合じゃなかった。

僕の肩に頸を乗せる少女の荒い息はそのまま、僕はどうすればいいのかわからず、とりあえず少女の背を撫でることしかできない。

それでどうにかなるかにはわからないが、病気の人にはよくこうしているような気がする。

こういうときには、自分に看病の経験がないことを恨みたくなる。

といっても、僕も妹も身体が頑丈だから、滅多なことがない限り病気なんかしないので、仕方がない。

不意に、首筋をなにかがなぞった。温かくて、ざらざらしていて、それでいて水っ気あるなにか。

全身を駆け巡る悪寒。

脳内に鳴り響くレッドシグナルに、僕は反応することができない。

金縛りにあったかのように、凍りつく肉体。

動かない。

動かすことができない。

指先から足先まで、まったく動かない。

何者かに身体のイニシアティブを握られたように、こちらの命令を一切受け付けない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【2】

そうして、時は訪れる。

「……っ！」

噛まれている。首筋に突きつけられた牙は、僕の首を抉るように突き刺さり、確かな痛みを僕に与えている。

身体が動かないから、いったいどういう状況にあるのか把握することはできない。

だけど、おそらく、僕に牙を突き立てているのは、この少女だ。

そう理解するのが早いかな、自分の中からなにかが失われていくような気がした。

ごくっ、と鳴ったのは少女の喉の音。

なるほど、『血』っていうのはそういうことだったんだ。

こういうとき、自分の理解力の速さが少し恨めしくなる。

この少女は普通じゃない。たぶん、世間一般で言うところの化物とか妖怪とか、そういう類の存在なんじゃないかな。

よくわからないけど。

首筋に牙を突き立てて、血を飲む類の存在と言えば、やっぱり吸血鬼になるのかな。

人間離れた美貌を持っているなあ、なんて暢気に思っていたけど、本当に人間じゃないなんて、こりゃ事實は小説よりも奇なり、ってことなのかな。

心の中で苦笑しつつも、僕の肉体は確かに異変を感じ取っていた。

抜かれていく血を感じながらも、動かない肉体ではどうしようもない。

もしかしたら、僕はこのまま血をぜんぶ抜かれて、死んでしまうのかな？

それは少し、嫌だな。せめて、父さんと母さん、妹になにかを残したかったな。

でも、僕の命ひとつで、この少女を救えるのなら、それはそれでいいことなのかもしれない。

吸血鬼かもしれないけど、絶世の美女と表現してもいいほどの女の子だし、艶めかしい喉の音とか密着した胸から伝わる鼓動とか、すごくいい。

なんていうか、すごく満たされる。見た目とか、ドストライクだし、こんな女の子に殺されるのなら、それはそれでいいかも。

自分で言うのもなんだけど、僕は思った以上に楽観的なのかもしれない。

というか、どうしようもないしね。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【3】

……あれ？

ふと、身体に違和感。血が抜かれたからか、少し貧血気味だけど、それでも頭ははっきりと思考を可能としている。

さっきまで動かなかった肉体の動きが解放されている。

加えて、どうしてか血を抜かれる前よりも軽いような気がする。な
んでだろ。

それはまあいい。

おいておこう。

とりあえず、今は首筋に噛みついた少女を、っと。

そう思ったのだが、すでに少女は僕から牙を抜いている。

息を荒くしていたさきほどまでの様子とは打って変わって、安らか

に、寝息を立てて眠っている。

血を吸ったおかげで、回復したのかな。

首筋に手を伸ばしてみる。

そこには確かに小さな穴のようなものが二箇所ある。

触れた手を見てみると、赤い血痕がそこには残っている。

やっぱり、吸われたんだよな。

そう自覚して、それでも生きていることを不思議に思う。

大抵のフィクション作品とかだと、吸血鬼に血を吸われた人間は死んでしまうか、吸血鬼のしもべになるかの二つの結末に分類される。

だけど僕は生きている。

だとしたら、僕は後者　吸血鬼のしもべになったのかな。

少しありえない妄想だけど、でも、実際に血を吸われたし。

考えても答えはでない。

答えを持つのは、僕の腕の中で眠りこけている少女だけだ。

僕は少女の身体を背に乗せる。

ここに残していくわけにもいかないし、なにより、僕がこの少女に一目惚れをした、もとい、少女のことが気になってしまっているのだ。

とりあえず家に連れて帰るけど、決して誘拐ではない。

それだけは言っておく。

でないと僕が本当に犯罪者になってしまうから。あくまで彼女を保護することと僕に起きた状況を把握するためなのだ。

誰にするでもなく、心の中で言い訳を残して、僕は少女を背負って帰途に着いた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【4】

少女を家に連れて帰って、僕はまず風呂に向かった。

別に少女に対して卑猥なことをしようと考えているとか、そういうことではない。

バイト帰りにシャワーを浴びるのは僕の習慣なのだ。

いくら例外に当たる出来事が起きたからといって、生活のリズムを崩すわけにはいかない。

少女は現在、居間にあるソファに横たわらせている。

体調が悪そうにも見えなかったから、特になにをした、というのはないけれど、一応毛布をかぶせておいた。

なんとというか、彼女の格好は、健全な青少年である僕にとっては毒に他ならないのだ。

シャワーを浴び終えて、ドライヤーとタオルを使って髪を乾かす。

僕の髪は男子にしては長く、よく女子みたい、と言われるような長さなので、手入れは欠かせない。

髪が乾いたところで、僕は居間へと向かう。

「……？」

居間に、少女の姿はなかった。

いや訂正。

「だれ？」

少女が寝ていた場所にいたのは、僕が出会った少女よりも、幾分か若い容姿の少女だ。

金色の髪や顔立ち、ゴスロリ服は変わらない。

でも、明らかに幼い。

……まさか、容姿が変化した……？

血を吸ったり、幼くなったり、忙しい娘だなあ、なんて思っている
と。

「ん……」

少女の唇から吐息が漏れて、その瞳が開かれた。

僕と同じ黒の瞳を持つ少女は、寝ぼけているのか、視界が定まれないように目だけをきよるきよると動かし、そして身体を起こした。

身体が小さくなったせいか、身につけているゴスロリ服がずれ下が
り、僕は思わず目を逸らしてしまっ。

ただでさえ露出が多いっていうのに、そんなにサービスされるとい
るいろヤバい僕である。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【5】

「えっと……大丈夫？」

目を逸らしながら、と言いながらも、目の端に少女の姿を残したまま、訊ねる。

僕の声は聞こえたようで、少女の目が僕を捉えた。同じ黒の瞳だというのに、どうしてか彼女の瞳は黒真珠のように美しく見える。

舐めたい、そんな願望は胸の底に沈めておこう。

「……だれ？」

僕がそうしたように訊ねる少女に、僕は答える。

「僕は伊浪恭平いなみきょうへいって言うんだ」

「きょうへい……」

首を傾げる少女。

おそらく、自分の中で僕の名前を検索してみたのだが、一致する人物がいなかったのだろう。

まあ、そりゃそうだろうけど。

対して僕も訊ねる。

「君はだれ？」

「わたし……アリーシア……」

「ありーしあ？ 可愛い名前だね」

言うと、少女、アリーシアは顔を赤くした。

しかし、瞬間的に、その顔が豹変する。

寝ぼけていた頭が覚醒したのか、見知らぬ存在である僕に驚いているように見える。

正直、聞きたいことはたくさんある。

君はいつたい何者なの？

どうして倒れていたの？

どうして僕の血を吸ったの？

僕はどうなったの？

だけど、残念ながら僕は女性に強引になにかを訊ねることができない。
ような性格ではないので、そうすることはできない。

アリーシアがその口を開いてくれるまで、待つしかないのだ。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【6】

思いつつ、アリーシアを見ています。

「……………なに？」

「い、いや、なんでもないよ？」

ダメだ。やっぱりあの服は僕には刺激が強過ぎる。

僕はアリーシアに一言告げてから、自分の部屋へと向かった。

なにか、着替えになるような服を探すためだ。

本当は妹のものを借りたほうがいいんだろうけど、妹は全寮制の女子高に通っているから家にはいないし、両親も海外で仕事をしているので、家にいるのは僕ひとり。

そんなときに妹の服がなくなっている、なんてことになれば、僕の立場が危つくなる。

ただでさえ、妹には変態扱いされているというのに。

クローゼットの奥から段ボールを取り出して、中身を取り出す。

僕の幼いころの服がそこにはある。

アリーシアの現在の体型からして、僕が小学生、それも高学年のときの服でいいかな。

それらしき物、無地の白シャツと膝までの丈のズボンを持って、居間に戻る。

「これ、よかつたら着替えて。そこを出たところに洗面所があるから」

渡すと、アリーシアは大人しく、僕の指示に従って洗面所へと向かった。

……というか、彼女、自分が縮んだこと、気づいているのかな。

……。

バタンっと、居間の扉が勢いよく開かれて、アリーシアが居間に飛

び込んでくる。

「……なにこれ」

「いやあ、説明する分には構わないんだけど、とりあえず、自分の今の姿をよく見た方がいいよ」

苦笑いをしながら、アリーシアに言う。

僕がそう言った理由。

アリーシアは、彼女が身に付けていたゴスロリ服を脱いでいた。

しかし、僕が渡した服は着ていなかった。

さあ、それから導き出される答えはなにか。

簡単だ。

「なかなかセクシーな下着だね」

身体が小さくなることによって、ぶかぶかとなった上下黒の下着は
ずれて、彼女の肌を露出してしまっている。

幼くなることで各部が膨らみを失っているけど、やはり、彼女の姿
はあまりにも綺麗で。

僕はダメだとは思いながらも、その姿に釘付けになってしまっ。

「っ！」

僕の指摘に悲鳴にならない悲鳴を上げて、そのまま駆け足で洗面所
へと戻って行った。

……いやあ、いいものを見た。

膨らみを失った胸に、くびれを持った腰回り。

白くて細い四肢。

……うん、良かった。

ひとり、ガッツポーズをする僕の姿が居間にはあった。

今なら変態と呼ばれてもたぶん否定できない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【7】

少しして、僕が渡した服に着替えたアリーシアが戻ってくる。

「説明、してもらえる？」

開口一番、アリーシアは言った。

「うん、説明するよ。その前に、ちょっとソファに座ってくれないかな？」

「なにするつもり？」

「大丈夫。やらしいことはまだしないから」

「……まだ？」

「冗談です。しないから、ちょっと座ってよ」

アリーシアは渋々ながら、ソファに腰掛けた。

僕は洗面所に向かつて、そこから櫛と髪留めのゴムを持ちだして、居間へと戻る。

ソファに座るアリーシアは訝しむように僕を見ている。

僕はそれに両手を上げて、なにもしないことを示すけど、どうにも信用されていないらしい。

鋭い視線に少しドキドキしながら、僕はソファに座るアリーシアの後ろに回った。

「こんなに綺麗な髪をしているんだから、丁寧に扱わないと」

「ん」

櫛でアリーシアの髪を梳かしていく。

よく妹の髪を梳かしていたから、こういうのは慣れたもんだ。

アリーシアの髪は引っかかることがなく、とても手入れが行き届いていることが窺える。

梳かされている間、アリーシアは僕の行動を不審に思いながらも、時折、気持ち良さそうな表情を浮かべていた。

ある程度整えて、最後に長い髪を、ゴムを用いて後ろで結う。

「よし、これでいいかな」

「……なんでこんなことするの？」

「僕が君を愛でたいから、かな」

……。

「冗談だよ？」

「冗談に聞こえない」

「まあ半分は本気だからね」

「今すぐにも離れたいけど、事情を聞かなきゃならないし……」

なんというか、もうすでに変態扱いを受けている気がする。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【8】

それはいいとして。

僕はテーブルのところから椅子を持ち出して、アリーシアの前に座る。

「それじゃあ、なにかから話そうかな」

「ぜんぶ。最初から、今までのことを」

わかった、と答えて、僕はアリーシアにすべてを話した。

僕が道端に倒れていたアリーシアを見つけたこと。

アリーシアが僕の血を吸ったこと、それに加えて、僕の身体が妙に軽いことや、気が付いたらアリーシアの身体が幼くなっていたことも伝えた。

すると、アリーシアは顎に手を当てて、考えるような仕草をした。

「わたしがあなたの血を吸った。するとわたしは幼くなり、あなたは身体に変化が起きた……」

「なにかわかったの？」

「……」

答える代わりに、アリーシアは僕を見た。

どこか申し訳なさそうな、そんな瞳が揺らぎながらも、僕を捉え続ける。

「なんて、ややこしいことか……」

「どづかしたの？」

「……今から話すこと、信じられる？」

「信じる？」

即答で答える。

「君がここで僕に嘘をついたところでメリットがあるとは思えないし」

それに、と付け加える。

「君みたいな可愛い女の子の言うことを、僕は疑わないよ」

少しきざつばい言いまわしだけど、僕は昔からそういう性分なのだ。

僕をこつこつ風に育てたのは父さんだし、そういう面でも、仕方がないだろう。

笑いながら言った僕に対して、アリーシアは少し顔を赤く染めて、しかし、すぐに真面目な表情になる。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【9】

「まず、わたしのことを話す。わたしの名前はアリーシア。血吸いの一族、吸血鬼と呼ばれる種族に属する妖魔」

「ようま?」

吸血鬼だろうな、ってことは想像がついていたけど、『ようま』という言葉に聞き覚えはない。

どついつ字を当ててるんだろう。

「人間で言う、悪魔や妖怪、物の怪の総称だと思ってくれれば良い」

なるほど、と頷く。

なら当てる字はおそらく妖怪の『妖』に、悪魔の『魔』で『妖魔』でいいはずだ。

「私はある目的で日本にやってきた。でも、移動のときに力を消費し過ぎて、倒れてしまったみたい」

「力？」

「わたしたち妖魔の力は、魔力と呼ばれる。その力を得る方法は妖魔によって異なるけど、わたしの場合は血を吸うことで、魔力を得るの。でも、事前に用意していた輸血パックをぜんぶ使ってしまったの」

吸血鬼って、輸血パックから血を得るんだ、なんて最近の吸血鬼事情に驚きつつ。

「それで僕の血を吸ったんだね」

「そう。でも、それがわたしの不幸であり、あなたの不幸」

どういうこと？と首を傾げる僕。

「あなたは、おそらく、《妖魔殺し》を持った人間」

「《妖魔殺し》？」

「そう。わたしたち妖魔にとっての天敵。妖魔を殺すことができる、

人間が持った異能の力。あなたはそれを所持している」

言われて、考えてみる。

僕にそんな力はない。

生まれてこの方十六年、そんな異能の力なんて大仰なものを使ったことはないし、その存在すら知らない。

僕はどこにでもいるような普通の高校生に違いなのだから。

「気づかないのも無理はない」

「どういうこと？」

「妖魔殺しの共通点は二つ。妖魔に対して優位権を得ること。……
と言っても、力に大小はあるから、すべての妖魔に勝てるというわけではないけど。もうひとつは、その力が生まれ持ったものではなく、後天性だということ。そして、その中でもあなたの妖魔殺しはたぶん、特殊なもの」

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【10】

次々と入ってくる情報をなんとか頭の中で整理する。

この世には妖魔と呼ばれる存在がいて、アリースアはその中でも吸血鬼と呼ばれる存在。

彼女は持つてきていた輸血パックを失い、魔力が不足して、路上に倒れていた。

そして、そこに通りかかった僕の血を吸った。

そしてそれが僕にとっても、アリースアにとっても不幸なことなんだと彼女は言った。

僕は妖魔に対して優位権を得ることができる妖魔殺しと呼ばれる力の所有者で、それにはいろいろ種類があるんだけど、僕の妖魔殺しは特殊なものらしい。

頭の中でなんとかまとめて、そしてアリースアの次の言葉に耳を澄ませる。

「あなたの妖魔殺しはおそらく、『否定』と呼ばれる力。妖魔に関するありとあらゆるものを否定する力。だけど、『否定』の力を持った人間はほとんど自分の力に気づかない」

「どうして？」

「妖魔殺しは普通、自分の意思で発動することが出来るけど、その中でも『否定』は自分の意思で発動することが出来ないものなの。だから、力が覚醒していても、妖魔と接触することがない限り、それに気づくことはない」

そこまで聞いて、ひとつの結論に至る。

「ということは、まさか、アリーシアは僕の妖魔殺し、『否定』の力を受けて……？」

アリーシアは頷いて、肯定を示した。

「あなたの血を吸った結果、わたしはあなたの『否定』の力を受けた。その結果が、これ」

自分の身体を示すように、アリーシアは両腕を大きく広げた。

「あなたの『否定』の力は弱いんだと思う。だからわたしを殺すま
では至らなかった。その代わり、わたしを弱体化させ、身体を幼
くするという結果に至ったんだと思う」

それがわたしの不幸、とアリーシアは言う。

僕の血を吸ったから、アリーシアは僕で幼くなってしまった。

そこに僕の意思はないし、血を吸ったのはアリーシアのだけど、
どうにも罪悪感が沸いてしまう。

咄嗟に謝ろうとして、気づく。

アリーシアの不幸は、僕の血を吸って、弱体化したこと。

だったら、僕の不幸はいつたいなんなんだ？

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【11】

「伊浪恭平」

アリーシアが僕の名前を呼んだ。

複雑そうな表情。

僕がアリーシアに向けていたような表情で、アリーシアは僕を見た。

そしてアリーシアは告げる。

どうしようもない現実を、突きつける。

「あなたは、人間じゃなくなった」

時が止まったと錯覚するような感覚に陥る。

頭を後ろから鈍器で思い切り殴られたような衝撃が、襲いかかる。

「……そうなんだ」

「驚かないの？」

「ううん。驚いてはいるよ。でも、なんとなく予想はついていたから」

アリーシアに血を吸われたとき。

アリーシアが吸血鬼だと知ったとき。

僕の肉体に異変が起きたとき。

可能性として、心のどこかに留めておいた。

自分が人間ではない、なにかになってしまっているかもしれないということを。

それでも、内心は穏やかではない。

恐怖はある。

不安もある。

だけど、きっとそれらを抱いたところで、僕は人間には戻れないの
だろう。

それをアリーシアの表情が物語っている。

戻れるのなら、ああも申し訳なさそうな表情はしないだろうから。

これはきつと諦めだ。

でも、それでいい。

どうしようもない現実なら、受け入れるしかない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【12】

「それでさ、僕はいつたいどういう存在になったの？」

「あなたは、わたしの使徒、具体的に言うと、わたしのしもべに近い存在に変質を遂げたの」

なるほど。

想像通り。

あまり当たっても嬉しくないけどね。

それに苦笑していると、不思議そうにアリースアが僕を見る。

「あなたは、楽観的ななの？」

「その言い方はひどくないかな？　せめて前向きと言ってよ」

あながち、アリースアの表現も間違っではないけれど、それを他人に言われるのは少し癢に感じてしまう。

「使徒かぁ……つまり、アリーシアと僕は主従の関係で結ばれたってことだね？」

「そうなる」

主従関係。

……なんだか淫猥な響き。どきどきしちゃうなあ。

「なに笑ってるの？」

「うっん、なんでもない」

思わずにやついていたらしい。

危ない危ない。

妄想の世界にトリップしてしまつてくるだった。

……使徒、か。

吸血鬼であるアリーシアに血を吸われたことにより、僕は人間ではなくなり、使徒になった。

それがどういう存在なのか、あまり詳しく理解しているわけではないけど、この身体に起きた異変は、確かに僕が人間ではない『なにか』であると告げている。

でもまあ、顔とか身体つきに目立った変化は見られないようだし、そういう点では安心していいかも。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【13】

「伊浪恭平」

「普通に恭平でいいよ」

「……恭平、あなたはどっする？」

その言葉に首を傾げた。

どうするって、それはいったいどういう決断を僕に迫っているんだ？

少なくとも、僕の目の前には選択肢らしい選択肢は用意されていない。

アリーシアの黒眼は揺らぐことなく僕を捉え続け、首を傾げる僕に選択を迫る。

「吸血鬼の使徒になったあなたは、これからどっする？」

「君と生きると言っのなら、それに従っよ？ だって君は僕の主なんじゃ？」

「わたしはあなたの主。でもわたしはあなたに強制はしない。あなたが生きたいように生きればいい。でも、使徒は主が死ぬそのときまで、死ぬことはできない。あなたはわたしが死ぬまで、死ぬことはできない。でも、わたしたち吸血鬼に寿命は存在しない」

「そうなの？」

「妖魔には存在理念と呼ばれるものがあるの。それはその妖魔の存在を支えるものであり、わたしたち吸血鬼の存在理念は『永遠』。永遠を司る妖魔であるわたしに、寿命は存在しない。つまり、あなたは半永久的に死ぬことはできないの。使徒になったそのときから、年を取ることもないし、寿命に縛られることもない。文字通り、あなたは『不老不死』になったの。それを踏まえた上で、今まで通り生きたいというのなら、それでもいい」

つまり、僕に示された道はふたつ。

アリーシアとともに、アリーシアの使徒として彼女と生きる道。

それが、アリーシアとは別れ、今まで通り、人間として、と言っても人間ではないのだけれど、普通に生きて行くか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【14】

「せっかく道を用意してもらって悪いんだけど、もうとっくに僕は選んでいるよ」

「え？」

そう答えて、僕は呆気にとられるアリーシアの前にかしずいて見せる。

アリーシアの左手を恭しく掴む。

「僕は君とともに生きる。それが僕の選んだ道だ」

「……いいの？」

「うん」

即答して、頷く。

「僕はもう人間じゃない。君は普通に暮らしてもいいと言っただけど、

そんなことはできないよね。だって僕には死がない。君が死なない限り、僕は永久に、人間に訪れる死という制約の外に生きることになる。いつかはだれかが気づくよ。おかしいって。そうなれば、そこにはもう普通は存在しなくなる」

アリーシアは僕に二つの道を提示してくれたけど、選べるのはそのうちひとつの道だけなのだ。

二つあったとしても、もう一方を選択することはできないのだ。

僕は人間じゃないから。

だから、仕方がない。

どうしようもない。

なら、僕が選ぶ道はただひとつ。

「君がよければ、君のそばに置いてほしいな。さすがに、ひとりで長い時を生きるのは寂しいから」

笑いながら言うと、アリーシアは顔を歪ませた。

「ごめんなさい。わたしがあなたの血を吸ってしまったから……」

「ああ、ごめん。別に責めるつもりで言ったわけじゃないんだ。だから気にしないでよ」

慌てて取り繕うが、アリーシアの顔は暗いままだ。

うーん、女性の扱い方には慣れてるつもりだけど、どうやら失敗してしまったらしい。

これはダメだ。

女性の扱い方には気をつけろ、と言い残した父さんに示しがつかない。

いや、父さんは生きてるよ？

なんだか死んでいるような言い方だけど、ちゃんと生きて、海外でバリバリに働いているよ？

それはいいとして、どうかして、彼女を笑顔にしてあげないと。

「ねえ、アリーシア。申し訳ないって思ってくれるのなら、笑ってくれないかな？」

「笑う……？ どうして？」

「僕が君の笑顔を見たいから。可愛い女の子の、可愛い笑顔が僕にとつての元気の源なんだ。だから、笑ってよ。そうして、もう気にしないで。僕を使徒にしたこと」

言っと、アリーシアは少し戸惑いを見せながらも、必死に笑顔を作ろうとしてくれた。

ぎこちない笑みに納得がいかないアリーシアは、何度も何度も、これは違う、こうでもない、なんて言葉を繰り返す。

その姿は十分に可愛らしくて、それを見ているだけでもうたまらない。

いや間違えた。元気になった、だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916ba/>

僕の愛しい吸血姫

2012年1月10日04時57分発行